〔古武道研究班〕

船越（富名腰）義珍の空手道思想に関する研究

青木清隆　中谷康司
宮本知次

The Thought of Karate-Do by Gichin Funakoshi

Abstract

The present study was investigated about the thought of Karate-Do by Gichin Funakoshi. Funakoshi considered karate that there had gymnastics top value, and spread karate in Japan. This idea was related to Ankou Itosu. In addition, Funakoshi established Karate-Do as art of defense. Therefore, Karate-Do was not combat skill and sports. This idea was inspired by Ankou Asato. We propose that the new leaders of Karate-Do should have realized about the thought of Karate-Do by Gichin Funakoshi.

1．はじめに

1－1．研究の背景と意義

我々はこれまでに富名腰義珍(注1)が空手道の近代化における全ての時期，すなわち沖縄における地位確立の時代，本土における宣伝の時代，日本武道としての地位確立の時代，戦後の復興と発展の時代の全てにわたって重要な役割を果たし，また大きな影響を及ぼしてきたことを明らかにしてきた[1,2,3]．これらの研究は，事実関係の中から富名腰の果たした役割または空手道の近代化の過程を明らかにするものであったが，富名腰が空手道に対してどのような思想を持っていたかについては検討してこなかった．しかし，空手道の近代化の全般にわたって影響を及ぼしてきた富名腰が，空手道に対してどのような考え方を持っていたかということは，その歩みの方向性を大きく左右してきたと推察され，空手道の近代化と現状を理解する上で非常に重要であると考えられる．これまで，富名腰の考えが弟子たちによって断片的に語られることはあっても，その空手道思想の全般にわたって考察を加えた研究は存在しない．そこで本研

究では，富名腰義珍の空手道思想について検討することを目的とした．

1－2．研究の方法

富名腰の生涯は明治元年（1868年，ただし戸籍上は明治３年）から昭和32年（1957年）までの89年間（数え年90歳[注2)]）の長きにわたる．この一世紀近い期間には，沖縄の廃藩置県（明治12年：1879年）や日清戦争（明治27-28年：1894-1895年），日露戦争（明治37-38年：1904-1905年），太平洋戦争（昭和16-20年：1941-1945年）と３つの戦争，関東大震災（大正12年：1923年）などの大きな出来事があった．また，富名腰自身の年齢的な変化や沖縄から本土へと活動の舞台を変えたことなどを考慮すると，その期間を一様に取り扱うことは出来ない．

そこで本研究では，沖縄における普及時代，本土における宣伝の時代，研究から集大成への時代，そして晩年の時代という４つの時期に区分して検討する．それぞれの時代を明治38年-大正10年（1905年-1921年），大正11年-昭和４年（1922年-1929年），昭和５年-昭和11年（1930年-1936年），昭和12年-昭和32年（1937年-1957年）に分けて分析した．年号によって区分を決定したが，本研究で扱う思想については，前後関係も重要となることから，上記の区分は一応の区切りとして，厳密な年号での区分としては扱わないものとする．従って，これらの大まかな区分に従いながら，その間の史料・資料に基づいて富名腰が空手道についてどのような考えを持っていたのかについて検討する．

1－3．研究方法の限界

先の研究でも指摘したように，空手史研究が歴史研究の対象とされにくい背景には，歴史研究に必要とされる一次史料が不足していることが挙げられる．これは明治の中頃までの稽古が秘密主義かつ個人指導を基本として行われ，教授形態が口伝を中心としてきたことや，太平洋戦争の戦災によって貴重な史料が焼失・散逸し，体系的な史料の入手が難しいことによる．従って，従来の歴史研究で行われるような一次史料のみに重きをおいて研究を進めていく手法を使うことは出来ない．そこで，本研究では二次史料や口碑記述の利用，事実関係の積み上げなど，様々な素材を使って思想や文化を明らかにしていく文化人類学的な手法も取り入れて検証作業を進めていかざるを得ない．

2．富名腰義珍の思想の背景

富名腰義珍は明治元年（1868年）から大正10年（1921年）までの53年間，数え年54歳までの

間を沖縄で過ごしている．富名腰自身の著述によれば，安里安恒の長男と親交があったことから，安里に師事し，唐手（当時）の稽古を始めるようになる[4]．安里は国王の侍従武官として，当時の沖縄では比類なき武芸の達者として知られた存在とされる．また，安里と懇意であった平安の型の創始者として知られる糸洲安恒にも師事している．富名腰の記述によると，沖縄の廃藩置県後（明治12年：1879年），安里は琉球王国最後の国王尚泰王に随行して13年間を東京で過ごしたとされる[5]．糸洲のもとでの修業期間を10年と書いている記述が残っていることから[6]，史料での正確な記載はないが，富名腰は少年期に安里に学び，その後，安里の不在中を糸洲に預けられたと考えられる．安里の帰琉後，再び師事したとする文献もある[7]．明治初期の唐手の稽古は未だ秘密主義のもとに行われており，師匠の家で早朝や夜中に人目を避けて稽古を行うというスタイルであったようである．この時代に２人の師匠から受けた教えが富名腰の思想の背景になっているものと考えられる．

その後，富名腰は教員として奉職する．教職の間，自身による唐手の稽古や両師匠の教えに基づいた生き方を続けてきたとある[8]．富名腰自身が唐手の普及に取り組み，唐手の世界で大きな役割を果たすようになるのは明治38年（38歳）頃のことである．

３．沖縄における普及時代

３－１．唐手の普及形態に関する思想

富名腰自身の著述の中では，明治38年（38歳）頃に唐手の普及活動を始めたとある[9]．しかし，当時を記した一次史料はない．紙面において富名腰の主張が明らかになるのは，大正２年１月９日（46歳）に琉球新報に掲載された「唐手は武藝の骨髄なり」という記事による[10]．ここで富名腰は，沖縄において，他の武道と同様に体育上で用いられる唐手が如何なるものであるかについての紹介を行なっている．この中において，従来は秘密裏に行われてきた練習が，学校教育に利用されることや軍での研究課題になっていることを喜ばしき現象として捉え，かつ「あらゆる武器の中には何れも缺點ありて體育上不均一の謗りは免れざるも独り唐手に於ては円満に発達する」と，唐手が全身を使用する運動として体育上，身体の均一な発達に有効であることを主張している．富名腰は明治38年頃から普及活動に入るが，沖縄県下での公開演武巡回や「体育としての空手」という意味の演武や解説を行なっていることから，この文脈は実行により裏づけされたものである[11]．つまり，この時期の富名腰は，空手を体育上有益なものと考え，そしてその考えに基づいて実際に普及しようとしていたことが分かる．この点，学校教育への唐手利用を推進していた師匠の糸洲安恒の影響によるものだと考えられる．糸洲自身

によって記述された貴重な史料として，明治41年に県に対して教育への唐手の利用を上申したとされるいわゆる「糸洲十箇条」がある[12]．糸洲はこの中で「唐手は体育を養成する」点を第一に挙げており，富名腰の記述はこの考えと一致する．また，この「糸洲十箇条」の第一条は体育ばかりでなく，「何れの時君親の為めには身命をも不惜義勇公に奉ずる」ものであると唐手を位置づけ，上申書の最後を「軍人社会の一助にも相成可申哉」とまとめている．この点，富名腰も「イザ鎌倉と云ふ暁には確かに普段の練習が現實」化すると述べており[13]，類似性が見られる．単に青少年における体育上の有意性を主張するのみでなく，その習得が変事には君主や国のためになるとの富国強兵上の公益性を主張している．

明治時代は明治天皇による教育改革が行われ，近代教育に基づく学制の導入や，近代兵器の導入が進む中，明治当初においては旧来の教育の一端を担ってきた武術教育は憂き目に遭っていた．しかし，生き残りをかけた動きとして，日清戦争以降，近代体育としての学校教育導入が検討される．この流れは，日露戦争を経た明治38年，富国強兵の機運の中での帝国議会における武術の随意科目採用の可決や，明治41年の同じく帝国議会における武術の正課編入の可決によって具現化されていく[14]．先の糸洲による上申も明治41年に行われたものである．従って，近代教育や近代兵器が導入される中，富名腰が自分自身を育んだ唐手の生き残りをかけて，その中心となる糸洲安恒に同調し，近代教育への導入や軍での利用を考えたのは自然な流れといえる．

3－2．唐手の範囲

富名腰は大正２年の記事の中で，先述のような唐手の教育導入を進めるために「安里，糸洲（いとす）［ママ，かつての沖縄では糸洲をこのように記載した］，東恩納（ひがおんな）の諸大家が丈夫である中に何とか方法を設けて縣當局と共に善後策を講」ずるべきことや，普及にあたっては「唐手に嗜（たしな）みある者」を配置し「最寄り最寄りで時々會合が出来る様にすれば暇ある毎に互に研究をなし将来の発展を期すること疑なかるべし」と，その発展のために県を巻き込んでの話し合いや，指導者同士の研究会の必要性を主張している．

この記事にある安里，糸洲は唐手の中で後に「首里手（しゅりて）」に分類される技術の唐手を専門とし，東恩納は「那覇手（なはて）」に分類される技術の唐手を専門とする．これら技術の違う指導者を結集して唐手の教育導入を図るということは，単に富名腰が自分自身の修業したものを普及しようと考えたのではなく，唐手を１つのものと捉え，両者の技術を併せ持った形で唐手を普及しようと考えていたことが分かる．

富名腰自身は，「首里手」や「那覇手」の用語には賛同せず，古来より用いられる「照霊（しょうれい）

流」，「照林流」という区分を用いた[15]．「照霊流」は「体躯肥満にして体力豊富なる偉大の」者に適しており，「照林流」は「体力貧弱にして術に重きを置く痩方の」者に適していると特徴づけている．安里安恒の口述を富名腰が記載したとされる記事(注3)においては，教授上の注意点として，「被教育者の体力と気質とを観て施すことである．若し教材の選択を怠り，教授の方針を誤る時は只に労多くして益なきのみならず反って被教育者の身体を傷うことがある」と説明されている[16]．これらのことから富名腰は，「照霊流」が主に那覇で，「照林流」が主に首里で行われていることを認めているものの，これを単に地理的条件で別のものとして確立するのではなく，唐手の中の分類として扱った方が教育上有益であると考えたのではないだろうか．唐手の中に２つの特徴を持つ技法を置くことによって，唐手は様々な習い手に対応できる教材として教育価値が上がるはずである．富名腰は，習う者の体質に合わせて，選択，教授することが出来る教材として唐手を体系化し，普及しようと考えていたと推察される．

実際に，富名腰はこの記事に先立ち，自らを会長として沖縄尚武会を立ち上げている．また，この記事の前後，安里，糸洲，東恩納らは相次いで故人となっているが，それぞれの後継者で構成された沖縄唐手研究会に参画し，唐手を１つのものとして体系化しようとしていることから，その試みは裏づけられる[17]．

3－3．唐手の技術

「唐手の種類」と題された記述には，型の種類に関する内容が記載されていることから，当時は「唐手」＝「型」と考えられていたことが推察される[18]．一方，先の「糸洲十箇条」，富名腰の記事（大正２年），安里（談）のいずれの記述にも技の分類といった項目が無いことから，技術に関する点は未分化であったことが推測される．安里（談）において，唐手の欠点として「世には手の使い方を評して足の秘術を詮議する者が居ないのは甚だ遺憾に思う．足は時に依っては手以上に利くことがある．所謂闘に於て，手と手と組み合う時は必ず足であることを忘れてはならぬ．足の使い方には投足，踏切と云うように，種々使い方があるが，時と場合によって其使い方も違うのだ．兎に角，足の利用と云うことを忘れてはならぬ」と，足技の活用が重要でありながら未分化あるいは未整理であることを挙げていることからもそのことが理解できる．

一方，安里（談）の記述に「組手」（現代での対人練習）の項目があることから「組手」という練習は当時から存在していたことが分かる．安里（談）は「組手は総て唐手の活用に過ぎない」との見解を示している．ここでいう「唐手」とは，先述の通り「型」を意味すると考えられる．つまり，「唐手＝型」であり，組手はその活用を知るためのもので，どのように使う

のかは「論より証拠，予め合手［ママ］を立てて試合(注4)を極めて置く必要」があるとしている．「糸洲十箇条」も，組手については言及していないものの「一々手数の旨意を聞き届け是は如何なる場合に用ふべきかを確定して練習すべし」とあることから，1つ1つの技の意味を正しく聞き届け，どのような場合に使うのかを理解して練習するように勧めている[19]．よって，この頃の唐手とは「型」であり，その用法を知る手段として「組手」を捉えていたと考えられる．

3-4．唐手の精神性

先述のように富名腰は唐手を体育的価値の高いものとして考えて，普及を志している．一方で，安里（談）は，「唐手と学問との関係」と題された解説において「唐手を稽古するのは，第一，精神の修養にあるので体育は其副次の目的に属す」と述べている．先に挙げた「糸洲十箇条」とは趣を異にすることから興味深い．さらに，戦いは「個人の闘も国家の戦争も終局は肉体を離れて智慧の争になる」と述べ，無学の武術家はおらず，「真に唐手を研究せんとすれば生理衛生柔術剣術馬術弓術経書軍書等あらゆる方面より機会を捕えて研究せねばなら」ないと，真の唐手に至るための智慧の必要性を説いている．また，戦闘法として「昔から唐手に先手なしと，受けることを教えて，入れることを教えざるは教育上，青年子弟を戒めた言葉であったろう」との見解を示している．ここで安里（談）は，先制力や，気を制するといった戦略上の先手の有効性を認めながらも，「国家存亡の場合，或は父母妻子に恥辱をかけ，敵が肉薄して止むを得ざる場合」以外に先手は許されないとしている．そして，最後に「君も最早血氣の勇は過ぎて今日は氣に渡る時期が到来している．今一歩進めば神武に入るのだ」と，富名腰への課題ともとれる言葉を残している．

これらの安里の考えがこの時期の富名腰にどのような影響を及ぼしていたのかを知ることは出来ない．しかし，先に挙げた普及に向けた体育上価値の高い教材としての唐手という捉え方以外に，精神性や武術性に関する高度な思想，あるいは「気」という概念が当時から唐手に存在していたことを示している．

3-5．ま と め

このように明治末期から大正期にかけて富名腰は唐手の存在価値を体育の上に見出し，これを普及しようと考えていた．そして，大正の初めに安里，糸洲，東恩納らが故人となると，当時の唐手修行者としては年長者となり，唐手の公開，教育への導入の先頭に立った．その後，富名腰は大正5年（49歳）の京都武徳殿における演武や大正10年（54歳）の皇太子殿下（後の

昭和天皇）への唐手演武台覧を指揮する等の大役を務めている．これらのことからも，それは裏づけられる[20]．

一方で，唐手の枠組みや技の整理，3－4に示したような様々な考え方の整備については課題として残されていたと推察される．

4．本土における宣伝の時代

4－1．普及形態に関する思想

富名腰は，大正11年（55歳）に「唐手」紹介のために上京し，嘉納治五郎の計らいによる演武会を機に，本土における唐手普及の機会を得る．機を見るや，沖縄に戻らずそのまま普及を始めるという行動は，大正期における東京と沖縄の交通の不便と費用負担を考えても，唐手の地位確立への並々ならぬ覚悟が窺える．その後，昭和16年（74歳）まで帰郷することなく，唐手の指導に専念する[21]．

富名腰は，上京したこの年のうちに本邦初となる唐手の解説書を『琉球拳法唐手』と題して出版する[22]．「第一章　唐手とは何ぞや」から「第二章　唐手の価値」，「第三章　唐手の練習と教授法」，「第四章　唐手の組織」，「第五章　基本及び型」，「附録」と続く，284頁に及ぶ大著である．この本において「この沖縄には，古来世界に誇る可き一種霊妙な武術がある．柔術には非らず，拳闘術にも非ず，ややそれに似て而も全然それ等の外に独特の分野を畫す可きもので，身に寸鐵を帯びずして徒手空拳克く敵を挫き，身を護ることが出来る．是即沖縄独特の拳法所謂「唐手」空手なるものである」として，唐手を沖縄固有の徒手空拳による護身術として紹介している．沖縄が誇るものを日本に紹介しようとする意欲が感じ取れる．また，富名腰が上京した時点において，既に「唐手」と「空手」を併記している点は注目に値するが，後に論ずることとする．

富名腰は，この本の中で「唐手の価値」として，「体育上より」「護身術として」「精神修養の上より」「唐手の栄誉」の順にその価値を挙げている．「体育上より」の価値は，筆頭に挙げられるとともに，記述の分量も他の項目の2から3倍の紙面が割かれている．富名腰は体育上の価値として，五体を左右上下均斉に動かし，力を集約する特徴があることから，体格を改造するのに有利であるとしている．また，練習の方法も，1.場所も器具も要らない，2.単独でも，団体でも実習し得る，3.変化に富む，危険を伴わないといった利点を挙げている．そして，沖縄では唐手を稽古する者に長寿者が多いことから，唐手の実施が長寿をもたらす可能性も示唆している．このことから本土に渡っても，沖縄において体育としての「唐手」として地

位を築こうとしていた路線と同じ方向性で普及を考えていたと推察される．

この『琉球拳法唐手』は翌年の関東大震災によって紙型が焼失したため，大正14年（58歳）に『錬膽護身唐手術』[23]と改題されて発行される．しかし，型の説明が挿絵から全て富名腰自身の演武写真に替っている以外は，基本的な文章に関しては殆んど変更が無い．改訂の手間の問題もあるが，写真などが差し替えられているにも拘らず，文章に変更が無いことから，この時点では基本的な考え方に修正は無いと考えられる．

4－2．唐手の範囲

『琉球拳法唐手』から『錬膽護身唐手術』では基本的な文章に違いはないが，技の類型に関しては若干の変化がある．『琉球拳法唐手』には三進立とよばれる那覇手によく見られる立ち方が掲載されていたのに対して，『錬膽護身唐手術』ではそれが除かれ，代わりに「ナイハンチ」（型の名称）の立ち方をとった「ナイハンチ立」が追加された[注5]．

先述のように，富名腰は教育上の視点から，体格・体質に合わせて首里手（照林流）・那覇手（照霊流）などを用いることが出来るように唐手を体系化したいと考えていたと推察される．当初は三進立が入っていることから，この試みを自分なりに本土においても移入しようとしたことが推察される．しかし，これを『錬膽護身唐手術』において削除したということは，この考えを変更したと読み取ることも出来る．単身での東京における教授においては，自らの主要な習得技法に特化して教授せざるを得ないと考えた可能性がある．

一方，昭和３年（61歳），沖縄唐手研究会を構成していた宮城長順（那覇手）や摩文仁賢和（那覇手及び首里手）らが，地域を変えて関西での普及をはじめ，宮城が大日本武徳会に登録するために「剛柔流」を名乗り，また摩文仁賢和も「糸東流」を名乗り，唐手を１つのものとして体系化する試みは困難になっていった[24]．

4－3．唐手の技術

4－3－1．技の類型

『琉球拳法唐手』においては，手の形として４種類（握り２種類，貫き手２種類），立ち方として５種類（閉足姿勢，八字立，前屈姿勢，後屈姿勢，三進立），手技として16種類（突手，受手，拂手，貫手，掬手，逆手，打手，掛手，摑手，引手，握手，組手，裏手，掻分，猿臂，變手），足技として15種類（蹴上，飛蹴，三日月，内股，外股，踏切，寄足，飛込，猫足，膝鎚，蹴込，蹴放，金的，波返，三角飛），投技として８種類（捻倒，鎖環，谷落，槍玉，倒跛，頸環，腕倒，咽抑），型として15種類（平安初段，ナイハンチ初段，公相君，ピンアン二

段・三段・四段・五段，ナイハンチ二段・ナイハンチ三段，セーシャン，パッサイ（大），ワンシュウ，チントウ，ジッテ，ジオン）を紹介している．型の中で，基本練習として平安（ピンアン）初段，ナイハンチ初段，変化が豊富な型として公相君の3つの型については動作手順の全てを示している．

『錬膽護身唐手術』においては，手技，足技，型に変更はないが，手の形として1種類（中高一本拳）が追加され，立ち方は1種類（三進立）が削除され，2種類（猫足，ナイハンチ立）が追加された．また，投技からは他の技と類似する2種類（倒跛，腕倒）が削除されている．

本土に滞在することを予定せずに上京した富名腰が，僅か半年でこのような体裁を整え，『琉球拳法唐手』の出版に至ったことは驚愕に値する．この分類の中には，足技に立ち方や運足法が含まれることや，手技に組手（対人練習）が含まれるなど，必ずしも分類上整然としない部分も存在する．しかし，何も土台の無いところからこれらを類型化するのは非常に困難であったと推察される．技の詳細や差異についての検討は別の機会に譲るが，このような類型化やそれぞれの類型に該当する項目の数を確保する努力からは，沖縄の誇るべき武術を本土の既存の武術並みに位置づけたいとの思いが少なからず働いていたと考えられる．

4－3－2．試合に関する思想

前述のように，組手は手技の1つとして紹介されており，特別な記述は無い．しかし，『琉球拳法唐手』および『錬膽護身唐手術』には，階級の付与に関する記述の中に「試合」についての記述が見られる．唐手は「剛術であるゆゑ，一ぺん急處（きゅうしょ）をやられたら，直ぐに致命傷であるから」，銃剣道のように試合が出来ないとしている．しかし，防具を用いた剣道が真剣や木刀を使って命懸けで戦っていた頃よりも幾分か堕落し，武術より運動に近づいたとしながらも，今後の展開として「防具を備へ急處を禁じてやるようになれば或は設備の如何に依っては柔剣道と同じく階級を附せることが出来ないとも限らない，又是非そこまで進展して行かねばならないと思ふ」と，試合の可能性を示唆している．

本土で主要に行われている剣道や柔道は試合を行っていることから，これに並びたいという考えや，また階級の客観性を求める内・外からの要求に応えることを考慮したのかもしれない．しかし，富名腰は大正13年（57歳）に初の段位を発行しているが，試合による審査は行っておらず，それ以降も同様に行っていない[25]．

4－4．唐手の精神性

『琉球拳法唐手』ならびに『錬膽護身唐手術』は全体に実技書の様相が濃く，主要部分に精

神性に関する記述は無い.『琉球拳法唐手』では，巻末に「附録」という扱いで「唐手に先手なし（修行者の心得)」の項目が設けられている．そこでは，「武」の字義を争いを止めることと捉え，「徒に手を出すことがあってはならぬ」と諌めている．また，慢心すると四方に敵を作ることになるから技術が進めば進むほど謹慎と謙譲を備えなければならないとしている．この他，「拳之大要八句」「古法大剛論草」「孫武子云」「解脱法（拳闘術)」などの漢文が添えられているが，解説は無い.『錬膽護身唐手術』でも，同じく巻末に「唐手研究餘録」なる項目を設けて，同じ文章を掲載している．

この段階では，精神性に関する考え方は文章化する程の整理がついておらず，掲載項目の題名にも示されるように，研究課題という段階にあったと捉えることが出来る．

4-5．ま と め

この時期の富名腰は，本土に渡り，本土の文化や環境に適応しながら，先に沖縄で行っていた体育上の価値に注目した普及を行おうとしている．その中で，様々なことを考慮しながら，唐手の技術を体系化し，本土の武術に匹敵する武術として体裁を整えていった．しかし，その中でも試合に関する考え方や精神性についての位置づけなど検討を要する課題を多く抱えていたと推察される．

5．研究から集大成への時代

富名腰は，昭和4年（62歳）の慶応義塾大学空手研究会創立5周年記念大会の席上で，「空手は既に宣伝の時代は過ぎ研究の時代に入った」と述べたとされる[26]．本研究ではこの記述に基づいて，ここからの時代を研究そしてそれを集大成していく時期として，時代の区分を行った．尚，同大会場では「唐手研究会」から「空手研究会」への改称も行われているが，富名腰もこれ以降，少なくとも昭和5年の原稿からは「空手」の呼称を用いている（先述のように「空手（からて）」の言葉自体は富名腰の記述においても大正時代から見ることができる)．

5-1．普及形態に関する思想

昭和10年（68歳）に解説書の集大成ともいえる『空手道教範』を発行する[27]．ここではまずこれまで用いてきた「唐手」の文字が「空手」に置き換えられている．富名腰は，空手は「沖縄固有の武術」でありながら，当時の沖縄では支那崇拝熱が盛んであった為にその頃の武人が好んで「唐」の字を用いたが，「唐手」というと，「往々，支那拳法と同一視される事があり，

沖縄の武術「から手」と言はんよりも，既に日本の武術「から手」となっている今日，「唐手」の字を当てる事は甚だ不見識，且，不適当と思はれるので，世と推し移るという意味を以て，今後は「唐」字を廃して「空」字に改める事にした」とその経緯を述べている．

また，同時に型の名称も変更している．それぞれ，ピンアン→平安（ヘイアン），パッサイ→抜塞（バッサイ），公相君（クーシャンクー）→観空（クワンクウ），ワンシュウ→燕飛（エンビ），チントウ→岩鶴（ガンカク），ジッテ→十手（ジッテ），セーシャン→半月（ハンゲツ），ナイハンチ→騎馬立（キバダチ），ジオン→慈恩（ジオン）と，それぞれの型に漢字の名称が当てられ，読み方も日本で馴染み易いものが考案されている．この経緯を富名腰は，型の名称は従来口碑のままに用いてきたが，「中にはその意味の不明なものもあり，教授上にも紛れ易く，且，立派に我が国の「空手」になり切っているものに強いて支那風の不可解な名称を襲用したくないので，不適当と思われるものは或は古老の形容を参酌し，或は著者の卑見を以て改称する事とした」とその意図を説明する．

これらの変更には，本土での普及にあたり，明らかなる脱支那思想・脱沖縄思想，あるいは「日本化」ともいえるような思想が強く押し出されている．既に本土に渡り10年以上が経過し，「空手」を日本の文化として確立しようとの新しいステージへの覚悟が窺える．

一方，解説書としての基本構造において，空手の価値を「体育」，「護身術」，「精神修養」の順に構成していることに変化はない．しかし，後述するように護身や精神修養に関わる内容は，書籍全般にわたって大正期の『琉球拳法唐手』，『錬膽護身唐手術』から充実が図られている．

5－2．空手の範囲

空手の位置づけは先述（4－2）のように分派の流れが固定化していることから，この点に関する記述の変化は認められない．富名腰にとって後進にあたる宮城や摩文仁の関西における唐手の普及が始まった時期である．分派ということを望まなかったにせよ，後進の成功を祈り，その領分を侵さなかったと推察される．実際に，彼らとのコミュニケーションは取りながらも，東京に築いた大きな基盤と自らの技術体系を集成することに専心していたように見受けられる．

5－3．空手の技術

5－3－1．技の類型

『空手道教範』においては，「凡そ物事を学ぶには必ず易より始めて難に進み，簡より入って繁におよばなければなら」ないとして，従来の平安の型の初段と二段の順序を入れ替えてい

る．また，大正期に書かれた『琉球拳法唐手』，『錬膽護身唐手術』には「投技」の項目だけが設けられていたが，『空手道教範』では「投技」に加え，「組手」が体系化された．ここで富名腰は「型だけ練習していたのでは血気の青年達には嫌(あきた)らぬこともあろうから」組手を練習しても良いと書いている．つまり，青年達は組手を求めていたわけである．富名腰は，普及の目的を考えた時に，必ずしも従来の枠組みに捉われない柔軟な姿勢や，学習者の要望に可能な限り対応する柔軟性を持っていたと考えられる．

ただ，このように組手を認め，数多く類型化して示しながらも，その位置づけは「型を離れてあるべきものでなく，すべて型の応用なのであるから，組手のために型を乱す様な事があってはならない．とかく組手に熱中すると型が悪くなる傾きがあるが，空手は飽くまで型を主とし，組手を従として稽古すべき」としている．組手はあくまで「型を理解して練習するためのもの」と捉えている点やその用法を「空手に先手なし」として防禦を第一義とする基本的な考え方は大正期の位置づけと大きく変わっていない．その点，組手自体に攻防（勝負）の趣を求める青年達とは隔たりがあった可能性がある．

この他，「居合」や武器に対抗する場合を示した「武器と空手」，「女子護身術」として捕り手なども体系化され，日本の武道としての多様性が洗練されている．

5－3－2．試合に関する思想

『空手道教範』において，総論の構成は大正期に出版された『琉球拳法唐手』，『錬膽護身唐手術』に類似しているにも拘らず，先述の試合に関する可能性については記載が無くなっている．つまり，富名腰は空手における試合の可能性を否定したことになる．この理由については，富名腰の空手についての考え方との関係で次節（5－4）において明らかにする．

5－4．空手の精神性

5－4－1．眞の空手・空手道

『空手道教範』の冒頭で富名腰は「眞の空手」とは，「技術よりも心術に重きを置き，平生は礼譲の中に体力を鍛え精神を練り，一朝有事の際には正義に従って全力を盡(つく)して当たる」ことであると述べ，「術より道へ」という項目を設けている．その中で富名腰は，「人あっての術で，術あっての人ではない」との概念を打ち出し，空手の「用い所を誤って，或は他と闘争し，或は人を殺傷し，或は自己の五体を損じ，或は名誉を失墜するが如き事があったならば，空手の有するあらゆる効果も，一切の長所も，一朝にして消滅してしま」い，「なまじい空手を習った為に却って身を亡ぼす様な事に」なってしまうから，術の用い方を誤ってはならない

と主張している．つまり，むやみに人と争うことで相手や自分自身を傷つけることがあってはならないという考え方を示している．

この考えは徹底されており，練習においての注意でも「「人あっての技」で，少くも己をよりよくせんが為に習ふ空手なのであるから，其の為に身を損じたり，病気を引き起こしたりする様な愚を演じてはならない」と述べ，練習の方法を誤ることによって自分自身を損なうことがあってもならないとしている．ここには徹底した身を護る，身を助ける，護身としての空手が説かれている．まさに冒頭に挙げられた概念の通り，有事の時には武術として身を護り，平素は体と精神を練ることで自らを助けるものとの位置づけを明確にしたものといえる．

従って，実戦をして技を磨くといった方法や，喧嘩術としての習得，あるいは誰かに勝つために攻撃力をつけるといったような考え方と「眞の空手」とは相いれないことになる．上述のような空手の精神を体得していないと，空手は喧嘩などに悪用され，人を傷つけ，また自分を傷つける有害な武術になってしまうだろう．このような考え方から対人練習について考えると，型を理解するための組手は「眞の空手」に適合するが，わざわざ相手と競い合い，攻撃力を競うことを目的とした「試合」は「眞の空手」には適合しないとの判断を下したものと推察される．

そして，「眞の空手」すなわち「空手道」は「内には俯仰天地に恥じざる心を養い，外には猛獣をも慴伏せしめる威力」を備え，「礼儀」を重んじ，「謙譲の心と温和の態度」を忘れず，「剛毅勇武の風」を養わなければならないとまとめている．

このような考えを示すことで，安里安恒から受け継いだ「精神の修養」を空手の修業目的の第一義として扱う考え方の集大成がなされたものと捉えられる．

5－4－2．礼儀と謙譲

富名腰は礼儀と謙譲について「空手に限らず，学問，其他何事でも教えを人に乞わんとする者は，須らくこの意がなくてはなら」ないとし，これがあることによって「教える人も気持ち好く教へるし，習ふ人も自づから実が入る」ことで得るものが多くなるとその効用を説いている[28]．また，先述の通り（4－4），謹慎と謙譲なくしては敵を多く作る可能性があることから，「眞の空手」の求める護身の論理を考える時，これらの項目は必須となる．礼儀もまた，それを欠けば敵を作ることから同様である．このように，考え方の全ての中に身を護り，身を助け，身を活かすという思想が徹底されていることが分かる．

5－4－3．護身として

護身の思想が，真の空手の基本理念であることは先に述べた．なぜ，富名腰は護身を基本理念としたのだろうか．これに対して『空手道教範』は「凡そ此の世に生を享けたる者は，必ず身を護り敵を防ぐだけの用意がなければなら」ず，鳥獣草木すら自ら身を護り，敵を防ぐから，「万物の霊長たる人間にしてこの用意を欠」いては，鳥獣草木にも劣るとの考えを示している．つまり護身を自然の摂理と捉えているのである．さらに，この摂理に従えば，防ぐ心は必要であるが，人を害する心はあってはならないという解釈も示している．

そこで，有事が起こってから後悔しても取り返しがつかないので，敵がないと思いながらも予め用心を持つために「無手勝流空手」が必要であることを説く[29]．一方で，先述した「空手に先手なし」のように，積極的に挑戦せず，防禦に重きを置いている点が空手の徳目であり，昔から「君子の武道」(『空手道教範』では「教養ある紳士の武術」) と呼ばれる由縁としている[30]．

5－4－4．智慧の必要性

『空手道教範』には解説がないものの，この時期に富名腰は智育・智慧の必要性を説いている．互いが「譲らなかったら必ずや衝突は免れない．これは皆何れも欲と欲の衝突で，個人の戦いも，国家の戦いもやはりその通り」であることから[31]，これを避ける必要がある．そのために智育・智慧が必要となる．

これらを避ける方法として，「国家の戦いも個人の闘いも大小こそあれ，作戦方法に就いて代わりのある筈はなく」，準備の重要性について強調する[32]．そして，孫子を挙げ，「彼を知って己を知れば百戦殆らず」「彼を知らずして己を知れば一勝一敗」「己も知らざるものは毎戦必ず殆し」として認識・観察の重要性を説いている．

ここで彼を知るための稽古として「来客のある時，彼の人は何の要件で来たかと，問うが口切らない中に察知する．後で話が出て果たしてこれが当たって居れば此方は彼を知った訳である」と日常生活でも可能な方法を挙げている．つまり，このような観察力をつけることによって相手が何をしたいかを知れば争いを未然に防ぐことができ，また争いを避けるだけでなく，善用して相手の希望に沿うように動けば好感を呼び，自分にとって良い結果をもたらすことにつながるはずである．富名腰の思想は単に空手道を有事の護身と捉えることを越えて，このような観察力を備えることによって，自分が不利な状況におかれて護身の必要が生まれないように，また更に進んで自分を良い状況に導くように活用するという，処世術のような領域にまで達していたことが読み取れる．

5-4-5．武道としての空手道の到達点

もうひとつ市販されている本には記載されていない富名腰の解説が存在する．昭和11年（69歳）に慶應義塾體育會空手部の創立10周年を記念して発刊された『空手道集成』に収録された「氣合術とは何ぞや」という論考である[33]．これは，昭和7年『拳』3号に掲載された富名腰の記述「空手の沿革」の中に含まれる「空手と氣合術」なる項目を更に拡充した形で説明される．

ここで説明される「氣合術」とは，「大喝一聲とは違」い，「精神と精神との戦いであり，気で気を打つの術」とされ，「精神と精神とが相対した時に，雙方の気を合わせ」，「その際，一方の精神気力が，一方の精神気力を牽制圧迫して活殺自在にする」こととされる．そして，理解の助けとして，心理学上からいえば「精神力を一事に集中する事，即ち凡ての能力と云う光線を一焦点に集」めること，哲学上からいえば「虚実一体，動静一致」，生理学上からいえば，「呼吸の術」，用からいえば，「機先を制すると云う事」，「我の已発を以て敵の未発を抑さふこと」，「先の先を制する」こと，「敵の氣を呑み，実を以て虚を突くの術」などと様々な表現を駆使して説明している．つまり「氣合術」とは，自らの精神力の集中によって相手を自由に出来る術である．さらに，「対手人の霊魂の一部，若しくば全部を脱却せしめ，或は自由を失わしめ，或は精神を喪失せしめ，或は幻覚錯覚を起こさしめ，或は迷想を奪い，疾病を除去するなどの術をも気合術の一種と云う事が出来る」と，様々な形でのこの「氣合術」を利用し，相手を自由に出来る可能性を示唆している．

また，これは空手道に限らず，神州武道の奥義として「氣を以て氣を制する」，「武道の修業もここまで至らなければ本当でない」と，武道上の到達目標を示している．そして，このような「氣合術」の活用によって，孫子のいう「百戦百勝，善の善なるものに非らず，戦はずして人の兵を屈す，善の善なるものなり」として示される「善の善なるもの」を実現することが，「氣合術の奥秘」としている．

これについても，大正期に安里から残された「神武」に至るための「氣」についての課題に応え，集大成として理論化されたものと捉えることが出来る．

5-5．ま と め

この時代も「空手」に体育上の価値を認め，その観点から普及しようという考え方に変化はない．しかし，普及のためには，種目自体の名称から型の名称・順序の変更，組手の体系化など可能な範囲での変更・開発は厭わない柔軟な姿勢が窺える．一方で，試合に関しては採用しない判断を下している．このような価値判断は，この時期に明示された護身術としての「空手

道」という思想があったからだと考えられる．富名腰の中では，その思想に基づき，変更しても良いものと，変更してはならないものの線引きがはっきりとしていたものと推察される．

また，この護身は有事に臨んで実際に身を護ることを説いただけのものではなく，自分自身を悪い状況におかない（身を助ける），ひいては自分自身の状況を好転させる（身を活かす）ところにまで及ぶ，崇高な思想であったことが明らかとなった．そして，これらの方法として気の活用を示唆している点は特筆に値する．このように，この時代には富名腰の様々な考え方が示されている．

これらの要約ともいえる内容が「空手二十ヶ條」（表１）として既に昭和５年（63歳）発行の慶応義塾大学空手部の部誌『拳』創刊号にまとめられていることから，少なくとも昭和５年には，あるいはそれ以前から富名腰の中でこれらの思想が成立していたものと考えられる[34]．

表１　富名腰義珍「空手二十ヶ條」

空手二十ヶ條
　師範　富名腰義珍
　一．空手道は礼に始まり，礼に終ることを忘るな．
　二．空手に先手なし．
　三．空手は義の補け．
　　×　×　×
　四．先づ自己を知れ，而して他を知れ．
　五．技術より心術．
　六．心は放たん事を要す．
　七．禍は懈怠に生ず．
　八．道場のみの空手と思ふな．
　九．空手の修業は一生である．
　一〇．凡ゆるものを空手化せよ．其処に妙味あり．
　十一．空手は湯の如し，絶えず熱度を与えざれば元の水に還る．
　　×　×　×
　十二．勝つ考は持つな，負けぬ考は必要．
　十三．敵に因って轉化せよ．
　十四．戦は虚実の操縦如何に在り．
　十五．人の手足を剣と思へ．
　十六．男子門を出づれば百万の敵あり．
　　×　×　×
　十七．構は初心者に，後は自然体．
　十八．形は正しく，実戦は別物．
　十九．力の強弱，体の伸縮，技の緩急を忘るな．
　二〇．常に思念工夫せよ．

出典：『拳』創刊号（昭和５年11月27日）に記述
『空手研究』（昭和９年12月５日・仲宗根源和編）に転載
『空手道大観』（昭和13年５月５日・仲宗根源和編）に原文写真掲載，解説は仲宗根源和による

6．晩年の時代

6－1．空手の普及形態に関する思想

富名腰（船越）は昭和18年（76歳）に『空手入門』という書籍を出版する[35]．この書籍において「富名腰」は姓を「船越」へと変えている．本土に渡って20年の時が経ち，自分自身も日本化する決意をしたのだろうか．太平洋戦争が始まった昭和16年暮～昭和17年１月初旬まで沖縄への帰郷を果たしていることから[36]，年齢を考えて，あるいは戦況を読んで，もう沖縄へ帰ることはないとの決別の意であろうか．その真意は分からないが，相当の覚悟があると考えられる．

『空手入門』の「自序」に，前章のまとめを支持する興味深い記述があるので抜粋する．

> 私が東京に空手を移植してから二十年程になる．近頃では運動や武道を口にする人々は勿論のこと，一般の人たちでも空手といふ名称位は知らない人は殆んどないが，そのくせ本当に空手といふものの姿を知ってゐる人は極めて稀である．況んや，空手が日進月歩して，今日の空手と十年前の空手とは同日の談ではなく，東京の空手は，沖縄時代の空手と全く面目を一新してゐるといふ事を知ってゐる人は更にさらに稀である．
>
> 武道にせよ藝道にせよ，凡そ道といふものには生命がある．生命があればこそ絶えず消長がある．道の本體は不易であるが，姿は變遷する．道に其人を得れば興り，然らざれば衰える．新興武道たる空手道に於ては，其の人を欲する事殊に切なるものがある．
>
> この小著を手にする人の幾人かが空手に志し，其の中の幾人かがこの道を體得して，更に後人に傳へる端緒ともならば，私の喜び之に過ぐるは無い．

ここには明治，大正，昭和と時代，場所，人の変化に合わせてその様態を変えながら，その本質だけは守り続け，唐手を空手道へと発展させた，まさに宗家としての思想が窺える．そして，自らが築き上げた活殺自在の空手道思想を理解し，また発展させてくれる人が現れることへの切なる願いが読み取れる．そのような人たちの登場を願って，裾野を広げる普及なのであろう．

6－2．空手の範囲

昭和16年（74歳），大学生を中心に「空手道の発展の為，現在ばらばらの各流派の統一をは

かり流派の違いはそのままにしても互いの交流を深め段位等もバランスのとれたものにするため，何らかの統一した機関を設」けようとする動きが起こった時，「富名腰師範は双手を挙げて賛成」したとの記述がある（結果は戦争により頓挫）[37]．このような記述からすると，富名腰は晩年まで空手を１つのものと捉える思想を維持していたと考えられる．

6－3．空手の技術

『空手入門』では天之形と呼ばれる新しい型が紹介されている．これは昭和16年（74歳），『空手道教範（修正増補版）』の発刊に合わせて発表された組手型である[38]．この他，型の名称には，新しく創作された「大極の型（初段～三段）」の名があり，また「騎馬立」とされていた型が「鐵騎（てっき）」と名を変えているなど様々な変化がある．しかし，これらは先述（6－1）の通り，枝葉末節の変更であり，船越自身の考え方に本質的な変化は見られない．

一方，技の効きについてはその指針が示されている．『空手入門』では「人の手足は剣と思へ」という安里の理念を挙げ，あらゆる体の部位を武器として使用できるようにすることを強調している．また，糸洲の「突き」が厚い板を拳の大きさにスッポリと突き抜くような「突き」であったことを示し，その技の効果についても目標を示している．

6－4．空手の精神性

特別に新たな記述が見つからないことから，前時代において思想的な完成が見られたと考えられる．『空手入門』あるいは生存中最後の著書となる昭和31年（89歳）の『空手道一路』[39]は，空手道思想について挿話を用いて説いている点が特徴的である．

『空手入門』の最後は，船越の師匠筋にあたる松村（宗昆）の挿話で飾られる．この話は，松村に空手で名の知れた上原某が挑戦する話である．この話の中で，上原某は松村の気合によって打ちかかって行くことすらできない．そして，この勝負に降参した上原某に松村は執着を捨てることで自他一体の境に至ったことが，勝敗を分けた原因であると語るところでこの話は終わる．説明こそされていないものの，まさに前述（5－4－5）の「氣合術」を説いたものであろうことが推察される．

6－5．ま と め

既にこの時期，思想としては一応の完成を見ていたと考えられる．むしろ，この時期の関心は空手道をどう正しく残すかということだったのではないだろうか．血気の若者は組手に邁進し，「争うこと」に興味が集中する．それは先述した「眞の空手」の理念とは相反するもので

ある．稽古方法として組手などを認めながらも，誰かが，いつか，「眞の空手」の理念に到達して欲しいと強く願っていたのではないかと推察される．船越は，昭和９年（67歳）に師範代の下田武を，昭和20年（78歳）に同じく師範代で三男の船越義豪（よしたか）を亡くす．戦時下における弟子たちの散逸や，折々での後継者の早世にその思いは切なるものであったと考えられる．

７．結　　語

我々は船越の空手道思想についてライフステージに沿って検討を行ってきた．生涯にわたって，空手を体育上価値の高い教材として捉え，普及しようという思想が存在していたことが分かる．これは，空手（当時，唐手）の教育導入を進めていた糸洲安恒の影響と推察できる．その一方で，空手の精神性の確立の為に研究を重ね，「眞の空手」すなわち「空手道」を「護身」という面から理論化することに尽力して来た．この護身は有事に臨んで実際に身を護ることだけを説いたものではなく，自分自身を悪い状況におかない（身を助ける），ひいては自分自身の状況を好転させる（身を活かす）ところにまで及ぶ，崇高な思想であったことが明らかとなった．これらは安里安恒の影響が色濃いものと推察される．長い普及の過程を通して，技やその名称，練習方法などについては柔軟に変化させたが，「眞の空手」の思想については不易なものとして堅持している．従って，自ら争い，攻撃力を競う試合とは相いれない結果となった．船越義珍の弟子は数多いが，その代表として，試合をしない道を辿ったのが松濤館を再建し２代目館長となった江上茂（えがみしげる）であり，試合をする道を辿ったのが日本空手協会を創設した中山（なかやま）正敏（まさとし）である．中山は最晩年の著書で「試合が盛んになるにつれ，空手愛好者が勝負だけにとらわれるあまり，ポイントさえとれば良いという安易な気持ちから，わざに空手本来のキビキビした節度ある動きと極めがなくなり，かたちだけの見せかけの格闘技になってしまったり，また暴力的な撲り合い同然の格闘に堕落するのではないかということである．それだけではない，もっと重大なことは果たしてこの組手や型の試合が空手道の創設者，船越義珍師が抱いていた空手道の心にかなっていたかどうかという点になると，なんともいえなくなるのである．なぜなら，船越師範の説かれた空手道の心は，きわめて高い倫理を要求しているからである」と述べている[40]．試合化を進めてきた中山が最後に漏らした苦渋の吐露である．中山も師匠の抱いた「空手道」というものを痛いほど理解していたと推察される．

推論になるが，船越は「空手道」を学ぶことで，護身は勿論のこと，自分を活かし，他人をも活かせるそんな若者を育てたかったのではないだろうか．船越義珍から考えて，既に孫弟子，曾孫弟子が指導者にならんとする時代である．彼らが「空手道」なるものの創設者の思想

を理解しているかは疑問が残る．「空手道」を標榜するからには，もう一度，その創設者である船越の思想・境地に鑑みて，自らの道を考える必要があるのではないだろうか．この論考がその一助になれば幸いである．

注

(1) 富名腰義珍は少なくとも昭和18年の書籍より名字の記載を「船越」に変更している．本研究では氏名の変更についても考察の対象とするため，75年間にわたって用いられてきた「富名腰」姓をベースとして用い，姓の変更以降で「船越」姓を用いる．

(2) 本研究では墓標を基準に，生誕を明治元年とした．また，月の先後によって同じ年号の中で年齢に違いが生じることを防止するために，年齢を表記する場合は数え年を用いた．

(3) 大正３年（1914年，47歳）の琉球新報に１月17日～19日までの３日間にわたり連載された記事「沖縄の武技　上・中・下」を指す．この記事は安里安恒の談話を富名腰（著者名は雅号の松濤（しょうとう））が記述した形を取っている．事実上は富名腰の記述であるが，本論中では唯一史料上確認できる安里の意見として取り扱うため，以下では安里（談）という記述を用いる．

(4) ここで使用される「試合」の字義は，競い合って勝負をつける競技としての「試合」を意味するものではなく，型の使い方を予め試しておくことを意味していると解する．

(5)『琉球拳法唐手』における「三進立」と『錬膽護身唐手術』における「ナイハンチ立」（後の騎馬立ち）の解説は「八字立の後開きの姿勢に少しく足を前に倒し，両足の力は外部より中央に集注するが如き心持である」という同じ説明文が使用されている．僅かに後者の記述に「即ち乗馬の姿勢に同じ」が加えられただけの違いである．しかし，図譜（前者は挿絵，後者は写真）で示された立ち方の形状には違いが見られ，前者はつま先側を狭く，踵側を広くとり，内に絞り込んだ形になっているのに対して，後者では足部がほぼ平行な形になっている．立ち方の違いに関する詳説は別の機会に譲るが，本文で示したように，この２つの立ち方は来歴・系統に違いがある．

参考・引用文献

1）宮本知次・中谷康司・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘（2005）空手道の近代化をめぐる船越義珍に関する研究課題．中央大学保健体育研究所紀要23：95-127.

2）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘（2007）空手道の発展における地域的２軸性：沖縄と本土．中央大学保健体育研究所紀要25：27-65.

3）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二（2008）空手道近代化の特徴―柔道との比較における考察―．中央大学保健体育研究所紀要26：25-44.

4）船越義珍（1943）空手入門．国防武道協会：35-40.

5）富名腰義珍（1934）恩師安里安恒先生の逸話．慶應大学空手部部誌『拳』８：18-24.

6）船越義珍（1943）前掲書４：155-177.

7）Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy (2004) Funakoshi Gichin Tanpenshu. International Ryukyu Karate Research Society : pp.158-163.

8）船越義珍（1956）空手道一路．産業経済新聞社：68-111.

9）富名腰義珍（1935）空手道教範．廣文堂書店（復刻版：1990年，カヅサ）：11-14.
10）富名腰義珍（1913）唐手は武藝の骨髄なり．琉球新報（1月9日）：二面.
11）富名腰義珍（1935）前掲書9）.
12）仲宗根源和・編（1938）空手道大観．東京図書株式会社（復刻版：1991年，緑林堂書店）：(1)-(11)，62-63.
13）富名腰義珍（1913）前掲書10）.
14）中谷康司・宮本知次・青木清隆・小林勝法・数馬広二（2008）前掲書3）.
15）富名腰義珍（1913）前掲書10）.
16）富名腰義珍（1914）沖縄の武技（安里安恒談，上～下）．琉球新報（1月17日-19日）：いずれも三面.
17）富名腰義珍（1935）前掲書9）.
18）富名腰義珍（1914）前掲書16）.
19）仲宗根源和・編（1938）前掲書12）.
20）富名腰義珍（1935）前掲書9）.
21）船越義彰（1994）義珍翁・もうひとつの顔．がじゅまる通信3：2-5.
22）富名腰義珍（1922）琉球拳法　唐手．武侠社（復刻版：1994年，榕樹社）.
23）富名腰義珍（1925）錬膽護身　唐手術．大倉廣文堂（復刻版：1996年，榕樹社）.
24）宮本知次・中谷康司・青木清隆・小林勝法・数馬広二・外間哲弘（2005）前掲書1）.
25）同上.
26）三田空手会（1999）慶應義塾体育会空手部75年史．慶應義塾体育会空手部：116.
27）富名腰義珍（1935）空手道教範．廣文堂書店（復刻版：1990年，カヅサ）.
28）富名腰義珍（1932a）空手は謙譲の美徳を養ふ（修行者の心得）．慶應大学空手部部誌『拳』5：39-41.
29）富名腰義珍（1932b）空手の沿革．慶應大学空手部部誌『拳』3：12-17.
30）富名腰義珍（1933a）空手道に就いての一考察．慶應大学空手部部誌『拳』7：5-9.
31）富名腰義珍（1933a）前掲書30）.
32）富名腰義珍（1933b）非常時日本の参考として．慶應大学空手部部誌『拳』6：16-18.
33）富名腰義珍（1936）氣合術とは何ぞや．空手道集成　第一巻：17-22.
34）富名腰義珍（1930）空手二十ヶ條．慶應大学空手部部誌『拳』創刊号：1-2.
35）船越義珍（1943）空手入門．国防武道協会.
36）船越義彰（1994）前掲書21）.
37）三田空手会（1999）慶應義塾体育会空手部75年史．慶應義塾体育会空手部：37-40.
38）富名腰義珍（1941）大日本空手道天之形（増補空手道教範附図）．廣文堂書店（復刻版：2004年，榕樹書林）.
39）船越義珍（1956）空手道一路．産業経済新聞社.
40）中山正敏（1985）空手道-精神と技術．カヅサ：42-45.